

あまり役に立たない読み物のページ

「端午の節供」^{せつく} つてなーに？

K・M・H

「端午の節供」って、「こどもの日」のこ
とですか？

いいえ、違います。実はその逆なんです。

第二次大戦後の一九四八年、新しく「国民の
祝日」を定める法律に従い、かつて「端午の
節供」が祝われていた五月五日に、「こども
の日」を祝うこととされたのです。「延喜

式」（九〇五〜九二七）と呼ばれる日本古代
の法典のなかに、「節会（せちえ）の制」と
いう重要な祝祭日に関する細則があります。

そこには、五節会の一つとして「端午の節
会」が記載されていますから、「端午の節
供」は、非常に古くから祝われていたとい
うことになりそうです。

ところで、「端午の節供」とは、一体、どんな特別の日だったのでしょうか。伝統文化の理解などと、おおげさに構えるつもりはありませんが、まあ、時には、こんなことを振り返ってみることも無駄ではないでしょう。

さて、まず「端午」という言葉を、百科事典などで引いてみます。と、「端」は「初」の意で、月の最初の午（うま）の日のこと、五月が午の月であることから、三世紀ころから中国では五月五日に各種の祭礼が行われるようになり、これが、「端午の節供」の始まりであるなどと、記されています。さらに、長い長い詳しい説明が、中国の場合、朝鮮の場合、そして、我が国の場合と続くわけですから、どうやら、東アジア一帯に広く伝わって来た風習であるようです。明治以降、政府の定めた祝祭日法によって曖昧にされてし

まった「端午の節供」という祝い日が、こんなにも長い歴史に支えられていたことに、私どもは驚きを禁じ得ないのではないのでしょうか。

旧暦の五月は、高温多湿の盛夏であり、伝染病や害虫の被害が甚だしく、「悪月」の一つでした。つまり、邪霊の跳梁する季節ということのようにです。この日に、蓬などの葉草を摘んだり軒先に菖蒲の葉を下げたり、あるいは、鍾馗様の絵を飾ったりするのも、すべて、邪悪な霊の侵入を防ぐ呪いだっただけでしょう。『日本書記』にも、邪気を払うために菖蒲を軒に吊るしたと記載されています。現在、「こどもの日」の前日くらいから、花屋さんでは花菖蒲が、八百屋さんやスーパーマーケットでは菖蒲の葉が売られています。そして、私どもは、家の中にそれを飾った

り、菖蒲湯をわかしたりしますね。これらの風習は、「こどもの日」に由来するというよりも、より古い「端午の節供」の遺産と言わなければならない。



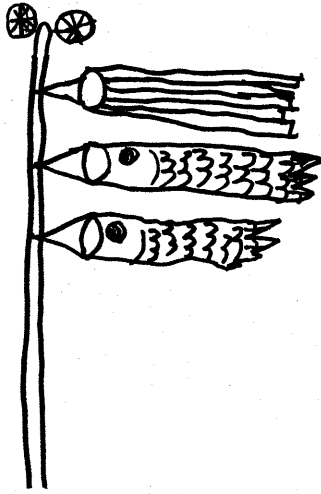
ところで、ここで一つ、不思議なことに気が付かされます。すなわち、邪気・邪霊を払うための「端午の節供」が、いつ頃、なぜ、男の子の祝い日に変わってしまったのでしょうか？

五月五日には、鯉幟を立てて武者人形を飾り、男の子の初節供が盛大に祝われます。それに、室町から江戸前期までは、この日に、「印地打ち（いんじうち）」と呼ばれる勇壮

な石合戦が行われたりして、何とも、男っばい一日でした。こうみてくると、五月のお節供は、いかにも「男児専用」に見えるのですが、しかし、民俗学の研究者たちは意外な事実を伝えてくれます。かつて、この日の夜は、「女の夜」と呼ばれていたのだと……。

近松門左衛門の『女殺し油地獄』のなか
に、「五月五日の一夜を女の家といふぞかし」という有名な一節があります。端午の節供のために屋根に菖蒲を飾ったその家が、「女の家」と呼ばれ、その夜のことを「女の夜」「女の天下」と呼んで、女性中心に一時が経過するという風習が、かつては広く全国に分布していたと言われます。間もなく訪れる田植えの時には、女たちは「早乙女」として重要な役目を担われます。農作業が深く信仰と結び付いていた時代には、その日々に

備えて、女たちは特定の家に忌み籠もって精進し、田の神を迎える準備をしたことでしょう。従って、「女の家」はその忌み籠もり場



の名残り、「女の夜」の振る舞い事は田の神をもてなす行事の名残と、考えることが出来るとされるのです。そう言えば、比較的最近まで、五月五日が「女節供」と呼ばれていた地方もあるとか……。

とすれば、女の日が男の日へと、アッサリ逆転してしまったのは、なぜなのでしょう。逆転の理由は、正直のところ、明確ではありません。ただ、三月三日の「上巳の節供」が、女の子の「雛祭り」として庶民層に定着していった動きと連動するものと、考えることが出来そうです。江戸中期以降の都市の勃興、とりわけ、豊かになった都市町人の暮らしぶりと生活感情がこの動きを促進したことも確かでしょう。

「雛祭り」は、中国伝来の三月上巳の行事と、日本古来の人形によって穢れを払おうと

する信仰が結び付き、江戸時代に五節供の一つに加えられました。もちろん、初めは、雛人形を壇飾りで飾り付けるやり方は、一部上流貴族のものでしかなかったのですが、豊かな町人の出現に伴い、徐々に庶民層にも広がっていくのです。人形は、本来は、人間の穢れを肩代わりする呪具でもあったのですが、同時に、古くから、貴族の少女たちの遊び道具でもあったようです。『源氏物語』のなかにも、幼い若紫が人形遊びをする姿が、愛らしく描かれていますね。従って、美しい人形を部屋一杯に飾って祝うこの日が、女の子のための祝い日として定着していくのも、当然の流れでしょう。

それに対抗するかのようには、「端午の節供」が男児向けに整えられます。先に見てきたように、この日は、農作業との関連では

「女の日」でありながら、一方では、邪気・邪霊を払うこととの関連でもあるのか、宮中では「騎射（うまゆみ）」が行われ、民間では「印地打ち」や「菖蒲打ち」など勇壮な行事も行われていました。これら上流貴族や武家に由来するとされる風習は、人形を飾るのに比して明らかに男性的、従って、女の子の「雛祭り」に対抗して男の子向けに取り入れられるのに格好だったのではないでしょうか。

そして、ここには、男女の養育を、ハッキリと区別して行おうとする考え方も投影されています。「男女七歳にして席を同じくせず」などという、儒教モラルに基づく武家社会の規範が、形を変えつつ庶民層を絡め捕っていく経緯を見ることが、可能かも知れません。

『幾利茂久佐（きりもぐさ）』（一八五七）

は、長野地方の様々な風俗の記録された文書ですが、このなかに、次のような一文が含まれています。すなわち、男の子のための「端午」の行事は祖父や父の時代にはなかったらしい、しかし、自分は祝って貰ったと……。そして、家の外に小旗を立て、槍や長刀など本物の武器を飾ったと記されています。さらに、長男は、色々な贈り物などもあって盛大に祝って貰えるが、次男以下は、父の手細工の紙織だけだったということ、また、町家では、内飾りといって幟も家の中に飾るようになったので、邪魔にならずに結構であるなどと綴られています。幕末の男の子向けの「端午」風景が想像される一文です。



一九三六年、恩賜財団母子愛育会（現在の愛育研究所の前身）は、民俗学者柳田国男の企画・立案に基づき、柳田の高弟橋浦泰雄を中心として、妊娠・出産・育児に関する伝統的な習俗の大規模な全国調査を行っていました。そのなかに、五月のお節供に関する調査項目も含まれていました。それらを見ると、昭和のこの時期に、この日は概して「五月の節供」と呼ばれていますが、なかには「端午の節供」と呼んでいる地域も混じっています。「初節供」ではなく、「初端午」という具合です。

お祝いの中身としては、里方から贈られた鯉幟や武者人形を飾り、かしわ餅やちまきを配るといのが多いようです。しかし、静岡県や愛知県からは、最初の男児の初節供には、凧を上げて祝う「初凧」と呼ばれる風習

が報告されています。さらに、先に引いた『幾利茂久佐』の場合と同じく、「五月の節供」を盛大に祝うのは長男だけという報告が、割と多くの地域からなされていました。次男・三男は、幟を立てないとか、あるいは内祝いしかしないなどと、ちゃんと断ってあるのもありました。

とすれば、幟を立て武者人形を飾るこの行事は、男の子一人一人のものではなく、「家」の繁栄のためということだったのでしょうか。そう言えば、「幟」とは、本来は「忌み籠もり」の場であることを記す標識であるとされ、また、神の降霊する依代（よりしろ）ではないかとも言われています。この場所では、いま、神を迎える準備が整えられていると、神に知らせるための目立つ標識、それが「幟」の起原ということなら、個々人の

ものであるにまして、その家のものと考える方が理に叶っているのかも知れません。そして、少なくとも、昭和の初めころまでは、そんな古い伝統や信仰が、色々な行事の背後に、ひっそりと呼吸していたということでしょう。

さて、新しい時代は、こうした背景を持つ五月五日を、「こどもの日」と命名して、国民皆の祝う祝祭日と決めました。年に一度くらい、子ども中心の祝いがあつてもよいということでしょうか。そして、日本のこの祝祭日を、「子ども尊重の現れ」と感嘆する外国人もあるとか……。そんなに誉められると、何となく照れてしまいそうですが、まあ、折角の休日ですもの、それぞれのやり方で大切に過ごそうではありませんか。